

# ルターの「ペスト書簡」を読む

宮 本 新

- 一 はじめに 一五二七年のルター
- 二 書簡の特色 単純化の回避／牧会書簡／まず生のあり様として
- 三 召命について 第一の突破／第二の突破／「神のかえりみ」を生きる／信心、即、隣人奉仕
- 四 結語

## 一 はじめに

ペストは一過性の疫病でもなければ、歴史年表の一点におさまる災厄でもなかった。コロナ禍が呼び起こしたものはこのような人類史的な記憶であった。一三四八年、ヨーロッパ人口の三分の一ないし四分の一に相当する人々を死に至らしめた黒死病は、一八世紀初頭までつづく約四〇〇年もの感染流行の始まりを意味した。ペスト

影響史を研究する石坂尚武はこれを「ペスト期」と呼び、その疫病の厄介な特色として「死の凄惨さ」、「大量死」、「（原因の）不可解さ」、そして「継続性」を挙げている。<sup>①</sup>その「被害ぶりは当時の戦争以上に悲惨」なものであり、「この被害の壮絶さ、そして、それゆえの苦難の思いが周期的に、程度の差こそあれ、四世紀にも及んだ」ことを詳細に論じている。<sup>②</sup>そのペスト期のいずれかを生きた人びとは、その周期性の故に何度もなんども、そしていつまでも繰り返される流行り病にいたたまれない思いを抱いたであろう。ところが、これほどのペスト禍の甚大な被害と影響にもかかわらず、それが記憶として人々の間にしっかりと保たれてきたわけではない。すでに社会学者のロドニー・スタークがローマ帝国下のキリスト教研究において指摘したとおり、人々の関心は政治史的な事件や戦争に目が行きがちであり、疫病の影響はほとんど無視されてきたのである。そのようなペスト期のご真ん中に宗教改革が起こっている。<sup>③</sup>

石坂は「ペスト期における宗教改革」という視点を打ち出し、凄惨なペスト体験が宗教改革期の人々の思い（心性）を形作り、思想形成に影響を及ぼした様子を論じており、ルターの人と思想もまたこの脈絡で再検討される余地があることを指摘している。<sup>④</sup>このペストと宗教改革という大掛かりな説の全体を詳細に検討することはできないが、少なくともペスト禍とのかかわりで一五二七年のルターの重要性に注目することはできるであろう。この年にヴィッテンベルクでペストが流行し、各地で同様のペスト流行が見られ、ルターその人もまたその脅威と混乱に遭遇し、周囲から助言を求められ公開書簡を執筆している。本稿はこの一五二七年の書簡の読解を目指し、次節においてその特色を三点に分けて考察し、ペスト禍においてルターが人々に何を言わんとしたのかを考えてみたい（第二節）。

ベスト書簡は公開書簡であり後代に至るまで相当な版を重ね読み継がれることになる。それほどに疫病はその時代、その場所で身近であった証左にもなるが、そこで助言し勧めを告げるルターの言葉は牧会的でありかつ神学的であった。それ故に手紙は具体的であり、綴る目的は人々の励ましと慰め、そして信仰において目覚め立ち上がり歩むことに方向づけられている。しかしもう一方の特色も忘れてはならない。その励めや励ましは「牧会的」であるとは、それが神からの励ましであり慰めであることを伝える使者の役割、み言葉の奉仕者であることを意味するのであり、そこに神学的精度が伴われる。本稿第三節ではこのルターの発言の背後または土台にある信仰の理解（神学）に焦点を当て、その確信がどこにあるのかを考えてみたい。これを果樹に例えるならば、書かれてあるベスト禍における分析と勧告はいうなれば目に見える幹や枝ぶり青々としげる葉や果実に相当する。人々はこれをルターに求めていたし、また求めるのだ。しかし一体どこからこの求めにルターは応じたのだろうか。これについては目に見えない地中であって支えとなる根元を見つめるような作業を必要とする。その根元を掘り返し観察するならば、ルターの召命の神学と全信徒祭司性というよく知られている神学がモチーフとして見られる。これは一見意外なことのように思われるが、ベスト禍とその社会的混乱もまた神を前に隣人と共に生きるいのちの危機として見つめ読み直すならば、ルターにおいてなんら不思議なことはなかったであろう。そしてまたこれがまたコロナ禍における私たちがベスト書簡からなにかを学びたいし、また学ぶことができる主要な理由になるであろう。

## 一五二七年のルター

現在、われわれが直面しているCOVID-19とペストは共にパンデミック（世界的流行）を引き起こした疫病であるものの、死の凄惨さと大量死というペストの特性は際立っている。一五二七年、ルターがヨハン・ヘスに宛てた書簡「人は死から逃れることができるのかどうかについて」（以下、ペスト書簡）は、そのような凄惨な現実根差した社会不安に対し助言を求められたルターが書いた手紙である。<sup>⑤</sup>ヘスは現在のポーランドに位置するシレジアの宗教改革の指導者であり、ルターに助言を求めたことに何ら不思議はないが、その時期のルターがどのような状態にあったかは確認しておく必要がある。

一五二七年は九五箇条の提題を掲げて宗教改革運動の口火を切ったあの日から一〇年の歳月を刻んでいた。ルター四四歳。二年前に結婚したカタリーナ・フォン・ボラ（ケーテ）との間に長男ハンスが生まれ、次の子もまたケーテの胎内におり、共に修道服を脱いだルター一家の歩みは順調であるかに見えた。しかしルターはこの年いくつもの深刻な試練に見舞われていた。原因不明の病から意識を失い倒れ、死を眼前にした「特別な不安」のうちにあったと伝えられている。<sup>⑥</sup>しかもそれは複数回に及び、ルター家の牧師ブーゲンハーゲンを呼んで、「自分の罪を懺悔し、聖餐を受け」、死の準備をしたほどのことであつた。その直後にヴィッテンベルクでペストの流行が認められた。そこで選帝侯ヨハンの避難勧告にもかかわらずルターは家族とともに町に残ることになったのである。これらの事情から想像できるとおり、ルター自身が英気に満ちて英雄的な決断を示して残ったとは

考えにくい。さらにこの年、聖餐理解をめぐるツヴィングリとの対決は激しさを増していた。ツヴィングリに対し自らの信仰告白を表明した『キリストの聖餐について』の刊行は一五二八年二月のことであり、その構想と執筆作業はこれら一五二七年の試練の束と無縁ではない。バスト書簡の末尾にツヴィングリの名が挙げられ、執り成しの祈りを率直にルターは読者に求めている。バストとツヴィングリの同居も一五二七年のルターを知れば腑に落ちる<sup>(7)</sup>。このようにバスト書簡を執筆した時期は、ルター自身が自らの原因不明の体調不良から死を意識した年であり、またツヴィングリとの論争は深みに入り、劇的な人生を過ごすルターにおいても死をめぐる特別な時期であった。

こうした一連の出来事に目を留めるならば、ヨハン・ヘスたちがルターに無造作に「キリスト者はバストから逃げ出してよいかどうか」と尋ねたわけではないことが容易に想像できる。ヴィッテンベルクでいわば「逃げなかった」ルターに尋ねているにはそれなりの前提と意図があり、その問い方は机上の空論のようなものではなかった。また宗教改革運動の脈絡でいえば、依然として予断許さぬ状況であり、ヴィッテンベルクという宗教改革の拠点に疫病が流行したこと、選帝侯ヨハンが人々を避難させたこと、そしてルター自身がその勧告に従わなかったことなどは、敵対陣営に格好の攻撃材料を提供することになったであろう。事態は複雑であり、ルターは「逃げるか否か」という質問に対して、逃げることも、逃げないことにも弁証を果たす責務があった。したがって、その筆の進み方は決して単調なものではなく、内容の繰り返し返しも多く、筋道を掴むのも容易なことではない。ただこの時点ではつきりしていることは、表題から「逃げるか否か」という単純な二者択一に応じた書簡の印象に反し、当のルターの応答はそれほど単純なものではなかった。たとえば、「自分も逃げなかったのだから

ら、キリスト者たるものは逃げてはならない」などとはいってはいない。むしろ逃げるか否かに対しては、逃げても不可、逃げざるも不可という二重否定から、逃げて可、逃げざるも可という二重肯定にいたるように書簡は進んでいる。ここにペスト書簡のルターらしさがある。そのルターらしさとは、現実のペスト禍への信仰からの応答であり、ペスト禍をめぐる状況で人になお残されている可能性を指し示している。

## 二 書簡の特色

ペストからキリスト者は逃げてよいのか。この問いに対するルターの応じ方は複眼的である。レトリックを駆使して装飾しているのでもなければ、だれも理解できない『高説』を述べているのでもない。書簡を読むときわめて単純な事実に気づかされる。ペスト禍に置かれた人々の状況と反応の多様さである。そこで人々を逃げる者と逃げない者に二分して語ることにどれほどの意味があるのだろうか。むしろ書簡では逃げる人にも逃げない人にも逃れられないものがあることを伝えている。それが「信仰と愛」であり、それこそがヘスからの質問の応答になり、人々への信仰への招きになっている。すなわち、その災厄において、どのような神を信頼し（信）、またその信仰から誰とどんな風に生きるか（愛）という二つのことが問われ、そこから問い直すことで「逃げるか否か」に向き合う道筋をつけている。

## 単純化の回避

バスト書簡で第一に注目したい特色は、その内容が一般的なものになっていない点にある。想像するに、いつの時代でも目の前の脅威と混乱の度が強いほど、単純化した助言と解決が望まれるものではなからうか。複雑で正解のない世界において大きな声で○×問題に因應するかのような単純でいて明快な道しるべはありがたくも思えるだろう。しかしバスト書簡は意図的と思えるほどに単純化が避けられている。書簡の冒頭からバスト禍において多種多様な人びととその反応があったことが言及されている。まず死の脅威、つまりバストから逃げるべきではないと主張する人々と、逃げてよいと主張する人々という二つの立場が取り上げられている。そしてキリスト者にも死をも恐れない「少数の強い信仰の人」と、大多数の「弱い人」がいることに注目し思いやりを伴う熟慮が求められている。さらに、死を賭して信仰を守るか否かの選択に迫られ信仰を捨てて逃げ去る人がいること、そのような行為をすることが到底許されない人たちがいることも述べられている。ここで具体的に言及されているのは、「霊的な職務」にあたる「説教者または牧師」である。この書簡の直接の宛先がヨハン・ヘスははじめ宗教改革運動の指導者たちであるから、彼らはこれを重く受け止めたことであろう。さらに注目したいのはこの霊的職務にある者への助言と並んで、「市長、裁判官など」の「この世の事柄に責任を負っている者」たちも神の召しにおいて同様に考えまた振る舞うようにと述べられている点である。この霊的職務と公的職務が合わせて、しかも間髪入れず神の召しを軸にして考えられている助言は、当時において大きな壁の突破として作用したであ

ろう。さらにそればかりではなく、この書簡ではもうひとつの壁が突破されている。神に召されているのは霊的職務や公的職務に関与する人たちだけではない。神の召しとは、職業や身分にかかわりなく、あらゆる間柄という隣人性を生きる生活の場でこそ考えられるものであり、自らの果たすべき役割や使命もまたそこで考えられ、また見出されるものとなる。つとに知られる宗教改革の神学、とりわけ万人祭司こと全信徒祭司性と召命をめぐる神学的洞察がこの書簡の根に相当する。この意味で、ペスト書簡とは神学文書である。

もし仮にこの書簡が、「逃げなかつたルター」に逃げてはならない理由を述べてほしい人たちに同調し、神の召しを語り持ち場を死守することや、全信徒の責任遂行を説き伏せることがねらいであるならば、この書簡から「キツイ思い」を抱いた人々も数知れずいたことになるだろう。しかしペスト書簡の召命の神学はそのような用法になってはいない。むしろ、逃げるか否かの単純化は脇へ押しやられて、問いそのものが変更を余儀なくされる。すなわち、逃げるのが許されるかどうか、ではなくて、逃げてもしも逃げてくともあなたがたには問われていることがある。問うているのはペスト禍を通して神があなたがたに、であり、問われているのは、信仰と愛についてである。すでにこの時点で、月並みな神罰論から離脱し、ペスト禍において信じる神がどんなお方で、また誰と、そしてどんな風に生きるか（共生）について考え応じることこそが、神奉仕の内実となる。いずれも、他人に逃げるかどうかを聞いて自らの答えにしたいと思うほどに事柄から遠ざかる神学的洞察に相当する。ルターは恵みの神学者である。本書簡においてもこれが手掛かりとなる。



## 牧会書簡

ベスト書簡は神学論文でもなければ、倫理の教科書でもない。ルターの牧会書簡である。「ルターの神学を理解するかぎは、そもそもルターの牧会的視点にある」と論じる石田順朗は、ルターの公の生涯が牧会者ではじまり牧会者で終わることに終始着眼している。ルターに改革者、説教者、神学者、神学者、教師、作詞作曲家や社会運動家といった実に多くの「顔」が見られるものの、ルターの中核的な関心は、管区内の人たちの「つのりにつった『魂への配慮』(Seel Sorge)」にあったというのである。<sup>①</sup> この牧会者ルターの視点を導入すると、ベスト書簡に見られる一様でない内容、また二重否定から二重肯定の展開、そして単純に逃げるべきかどうかに依えていない理由がより明確になる。社会倫理として「逃げるべきかどうか」を問うならば、事柄の善悪、成否が問われることになるが、牧会的観点はその渦中にある人間とその置かれた現実を射抜く視座をもう一つの現実(信仰)から差し出すことになる。

ルターの周りには事実、多種多様な立場の人たちがおり、牧会的視野から見つめ直されている。そこには逃げる人もいれば、逃げられない人もいる。逃げるができる人もいればできない人もおり、逃げてはならない人もいれば、逃げるのが許される場合もある。そしてルターはこの事態に牧師として向き合う。つまり逃げるも逃げなくても牧師はその人たちに関わる。そして祈る。その関わりの根柢は、神の言葉の関与がそこにあり、その人にあり、そして現にあることを認め、あるいは信頼し期待するところにある。この牧会的観点から人は神

を前に隣人と共にある生を生きていることを確かめる機会にもなる。ペスト書簡において確認できるのは、どうするべきかの回答というよりも、各自が神と隣人と共に決断する「仕方」についてである。

### まず生のあり様として

したがって、この書簡の表題が社会倫理を問うているにもかかわらず、ルターの返答は問いの内容そのものをずらしている。つまり逃げるべきかどうかというよりも一段深いところに立ち、むしろ逃げても逃げなくとも、各人の生のあり様を根源的に問い直すところから各人が決断できる道筋を示している。文中にある「信仰と愛」とはその立つべき所を示すしるしであり、矢印のようなものである。そこでいのちの根っこにあるものを見つめるようにとの勧告がなされている。ペスト禍に対する様々な反応を示す人々へ魂の配慮と、とりわけ疑似的な神学への懸念がそのような勧告へと至らせている。その懸念された事態を書簡から要約するならば、おおよそ以下のようになる。

ペスト禍に見舞われてパニックにおちいる人々が多数おり、必要以上に恐れた結果、隣人を忘れ、逃げだし、「キリストをそこにおきざり」（ルター）にするかのような人たちがいた。<sup>⑩</sup>他方で、「ペストや死から身を守ることをないがしろにし、医薬を用いることを嘲り怠る人たち」や、「患者と飲んだり、遊んだりして、自分たちの勇気を示そう」とする人たちがいた。さらに、感染した者の中には人にうつせば助かるという迷信じみた理由から、意図的に人々の間を歩き回り伝染させようとしたり、自分が感染したことを悔しがり、他人を巻き込むため

にこつそりと伝染させようとする者などいたようである。<sup>(1)</sup>このような様々な問題行動が見られる中で、ある種の信仰上の装いでヒロイズムを人々に吹聴する者たちがいたようである。彼らにしてみれば、信仰者の信仰がホンモノであるならば、神は罰となるペストをもたらすこともしないし、たとえ与えたとしても神のご意思で回復させるであろう、と考えたのである。したがって、ペストから避難し逃れることは不信仰であり、同じく予防や治療を行うこともまた不信仰なこととみなされるのである。

このような疑似的な神学に対するルターの見解は、はつきりとしている。そのような見解や態度は、たとえ神の名がそこで語られているとしても、信仰とは何のかかわりもない。なぜならその言動は、神を信頼しているのではなくて、ただ神を試し利用しているに過ぎないからだ。そこでルターは「根っこ」にある考え方（何を信じ、どう隣人と生きるか）に目を向けるように、とうながしている。神を信頼し隣人を愛することにおいて、逃げるのがよしとされる場合もあれば、逃げずに留まることこそがよしとされる場合もある。肝心なのは、あなたの神、あなたの隣人という二つの他者を前に、そして他者と共にペストとその状況に應えることであつた。たとさらにパニックに陥り極端に走ることも避けられるべきであるが、それ以上に疑似的な神学にすぎり、あるいは強いられて死をも恐れない態度で隣人に迫る極端に走らないよう助言されている。以上のようなペスト書簡の応じ方は、信、即、愛を人が問い直すだけでなく、むしろ信、即、愛から自らを問い直すことで得られるものがあるという信頼を土台にしている。そしてこれこそがルターが長年に取り組んできた神学上の問いであり、長い年月をかけてみ言葉と苦闘し到達した召命理解の経路である。

### 三 召命について

ペストという疫病は人間の病を併発する。ルターはこれを「想像と恐れ」でかかる病として見つめ、牧会的関心からの関わり、そして神学的確信からの応答をペスト書簡で明らかにしている。<sup>(12)</sup>もし「逃げるべきか否か」を考えるならば、二者択一の○×の答えをルターは差し出さないし、むしろそれは意味がないことになる。各人が自らの境遇や人生の諸相に立脚して考えられることこそが牧会的な目標となり、励ましとなる。そこで神に祈り、み言葉に聞き、熟慮することは、ペスト禍において核心的な行為であり、その点でペスト禍の教会の役割も明確になっている。これらはみな、キリスト者におけるいのちを守る行動に相当し、守られるいのちを定義すれば、神の前に隣人と共に生きるいのちとなる。そしてその守り方は、ただ自らの身体や生命を不安と恐れから守るというのではなくて、自分と他者の生命と健康、その身体と心の健康を守ることの一切が、神の関心事であることを信頼し、ここにかかわることが召しなのである。

したがって、ペスト書簡はルターの信仰の理解（神学）に基づいており、その神学的確信を抜いては文意も違ったものになる。その確信として、あらゆるキリスト者がイエス・キリストにおいて祭司性を帯びているという万人祭司こと全信徒祭司性があり、またその祭司性の故に人はあらゆる間柄において神に召され託されているものがある、と考える召命神学がある。この召しの神学について、ダグラス・シューマンが「その意義において

義認の教理に匹敵するもの」と指摘するとおり、バスト禍においてもまた、「この世におけるキリスト者の自己理解と行動について革新的な影響を及ぼした」と考えてよいだろう。<sup>(13)</sup> このルター（ルーテル）らしさはバスト禍においてあらゆるキリスト者が、自分が何者であり、またいかに生きるかを考える道筋を提供することになるが、さらにそうであるために当時の教会で浸透していた二重の縛りが解除されなければならなかった。一つ目の縛りとは召しが聖職者に限定されていたことにあり、さらに二番目の縛りが聖職であれ公職であれ職務職業、階層的身分に神の召しが限定されていたことにある。これら二重の縛りが解除され壁を突破してこそ、神の召しは全信徒におよぶものとなり、神を前に隣人と共にある自らの生に立脚し考える道筋を得ることになる。

## 第一の突破

召し・召命という言葉はもともと日常生活に根差した言葉であり、神学的な精査からは縁遠くゆるやかに神の招き、と考えられてきた。ところが四世紀末あたりから事情が変わり、この言葉が運ぶ意味内容に格段の変化が見られ、中世の修道院制へと接続されていった。<sup>(14)</sup> そこで召命はあらゆる人々の存在に響く言葉ではなく、世俗を離れて修道生活に入ることや、聖職に召されることを意味した。その集約的展開が修道請願に到達すると、召しは世俗社会とそこで生きることから離脱し、神に仕え賛美する生活を意味するようになった。そこでルターが看取した修道制の問題は、あたかも二つのレベルの救いと二種類のキリスト者が存在するかのようになってしまったところにある。<sup>(15)</sup> そのルターが以下のように召命について語る時、そこで強調されているのは世俗内召命であり、

また神の召命のこの世性とでもいふべき特性についてである。「すべての聖徒たちは、同じ信仰において生きべきであるし、同じみ霊によって動かされ、導かれる……人は、前もっては知られていないさまさまの仕事、場所、時、人びと、さらに種々の状況を通して、指示し導きたもう神に従わねばならない。これは信仰の教えるところであつて、聖徒らはすべて、各自のそれぞれの召命によってそれを教えられているのである」<sup>(16)</sup>。そして「それがわかれば、もはや、巡礼に出かけるとか、何か神聖な仕事でもしようとは、言い出すことはなからう」<sup>(17)</sup>。

ペスト書簡ではこのような召命理解に基づいてまず、「霊的な職務」に携わる者たちに次のように語りかけている。「説教者や牧師といった霊的職務にかかわる人は、同様に、死の危険が迫ってきた時、そこに留まり、残る責任があります」と。牧師たちの責任性が第一に喚起されているのは、書簡の宛先がヘスたちのような牧会者に向けられていたからであろう。彼らの優先的責務はペストによって死に直面する人々のことを第一に考え、この人たちに向けて「信仰によって死に勝利するために、神さまのみ言葉と、聖礼典によってその良心が強められ、慰められる牧会」にある<sup>(18)</sup>。このような霊的職務を担う者たちが「逃げるべきか否か」を問われるならば、それは各自の神の召しを思い巡らし、熟慮することからの答えとなる。ただし、ここで注意したいのは、ルター自身は聖職者ならば留まるべきだ、などと断じているわけではない。むしろ神の召しを中心にして、自らが逃げて避難するべき可能性もまた吟味するようにうながしており、神の召しを軸にして逃げる場合もあれば、逃げずにとどまる場合もあることが肯定されている。

この「霊的職務」を担う者につづいて、間髪いれずに「公的な職務」にある人々にも同じことが述べられている。「同様に、この世の事柄に責任を負っている者、たとえば市長、裁判官なども残るべきです」<sup>(19)</sup>と。なぜこの

ようなことが言えるのだろうか。ルターによればそれは、「町や国を治め、守り、支えるために神さまのみ言葉はこの世の権威を建てられた」からである。現代神学における「二王国論」とは霊的な世界に対しこの世的な世界に距離を置いて関わりを断つという、分ける側面<sup>々</sup>に批判が加えられるが、ここではむしろ、分ちがたい側面<sup>々</sup>に着目し論じられており、二王国論というよりも、この世界を多元的現実で把握する二世界統治説で事態が理解されている。その神学的イメージは神の世界とこの疫病に苦しむ世界があたかも二つの別々の世界であるかのように見えたとしても、「神のかえりみ」という一点において一貫性が保持されている。それぞれになすべき務めがあり託された働きがある。そこに聖俗の分はない。それゆえにベスト禍において、聖務を果たす者も公務を託された者も自らが信ずるところでいのちを分かち合う隣人に仕えることこそが召しに応えることになる。これが召しの神学における第一の突破点になる。

## 第二の突破

ルターは言う。「今私がのべた二つの秩序は他者に対して義務と責任を負っている他のすべての人々にも当てはめられなければなりません<sup>②①</sup>」と。この「他のすべて」とは、主人と召使、親子、また広く一般社会にみられる賃金雇用の関係で働く人たちのことが言及されている。こうして、第一の突破に見られる霊的職務から公的職務への召しの射程の延伸は、さらに霊的／公的な職務・職業を担う者たちの召しから、あらゆる間柄を生きる人たちの召しという射程の大幅な延伸へとむかっている。それは石田がいうとおり、「大胆に、聖俗の二元化を打破

して、この世にある職業と身分のすべてに、この語（召命）を適用した」ルターの神学的確信の徹底であり、その徹底化の帰結が第二の突破にあたる。<sup>(21)</sup>

この二重の突破は神の召しの民主化ともいえるが、しかしこれを近代的な個人の自律尊重の原則と重ねてみるに困難もある。『万人祭司』の民主化は、同時に神に対する受動性の徹底化をともない、先に引用したとおり、万人祭司性の生きた脈絡は、「信仰の教えるところ」を「各自のそれぞれの召命によって」見出し、「神に従わねばならない」ところにむかうはずだからである。

周知のとおり、ルターの自由理解は『縛られた自由』という現代的感覚に照らせば逆説的な内容になっている。ペスト禍という切迫した事態で以下のようにルターが述べるとき、ここでもいのちの守り方は『自由』と『縛り』の組み合わせで一貫している。「キリストのみ言葉は、私たちを他者に縛りつけているのです。困難のなかにある隣人を見捨てることは許されません。すべての人は、自分が他者にしてもらいたいと思うことを、同じように隣人にも行う義務があるのです」。<sup>(22)</sup>ここで肝心な点は、信仰と召命、そして神を前に隣人と共に生きることが、義務という言葉をかなめとして理解されている点にある。では、ここでの義務とはいったい何を意味するのだろうか。

こんにち、義務は社会通念上の言葉として用いられることがあっても、ルターがごく当然のようにキリスト教信仰とその理解、すなわち神学的義務論が論じられているわけではない。むしろ義務といえば、他人に対して何かをさせたい場合や、不履行に対し責めたりペナルティを与える際の言葉になる。しかし従来の召命の神学に沿って考えるとキリスト教信仰には自らが選ぶというよりもむしろ、引き受けるという側面がある。信仰や召しと



いうものが、あたかも自らの価値観と能力に見合うもの、あるいは他と見比べ選択する対象物とみなされる場合、神学的義務論の必然性は見えてこない。しかし神に召されることもその信仰も、人生の一回性のゆえに目の前に迫ってくる現実として引き受けるか否かの決断の範疇でとらえるとき、それは権利の宗教というよりも、義務の宗教として意味になるのではなからうか。ペスト書簡において、「逃げるか逃げないか」を自由と権利の範疇で考えるならば、ルターにとつて、それは宗教的に覆いかぶせるべきものではないことになる。しかし、神を前に隣人と共にわかちあうのちを見つめる際に、そこではたとえ逃げることでなくても逃げない場合もあれば、たとえ留まるべきであつても逃げる場合もある。それは神の言葉に縛られた良心において決断する事柄となり、その決断の理由は必ずしも法的社会的な相互義務ではなく、あくまでも神を前にした神学的義務論として神のことに縛られた良心から理解されるべきことになる。<sup>(24)</sup>

この点、ボンヘッファーが各人の召しやイエス・キリストとの出会いについて、個人的な啓示の必要性をしりぞけて「説教を聞き、礼典を受けよ」と端的に述べたのはこのルターの召しとその教会理解に連動した典型例である。<sup>(25)</sup> 一方で召しの神学があり、他方で全信徒祭司性との掛け合わせがある。そして自らの良心は神の言葉と教会の共同性につながっている。石田はこのような召しの理解を「共同原理」という言葉で説明し以下のように述べている。「教会を構成するものは、キリストをかしらとする信徒の群れ以外にはない」。つまり教職を含む全信徒は「共同原理に立つ教会観と牧会観」に立つことが求められているのであり、聖職者・信徒という二種類の身分理解は解除され、聖職者は教会の構成要員とはならないことを意味している。<sup>(26)</sup> その共同原理はまずもって神の言葉に縛られている信徒集団に見られる。

神に召されるとは、個人、即、共同体的出来事であり、それは与えられた権利というよりも、神と隣人に応じる義務論になる。この神学的義務論において、説教や教えの職務は、「誰がそれをしてよいか」という権限や権利の問題よりも、「だれを召し出すべきか」という選ぶ側の委託行為と選ばれる側の受諾行為からなる共同の責任行為が関心となる。この共同の責任行為の遂行において、再び確認されるべきものが「共にみ言葉に聞いて、共に祈る」という教会的共同性であり、それは法に先行する。

ペスト書簡はこのような若干入り組んではいるものの全信徒祭司性の具体例となり、神の召しの二重の突破という事態を順を追って考察するならば、実はこれらはまったく逆の経路で考えるべき事柄でもある。つまり、神学上の現実としては、まずあらゆる信仰者（全信徒）の根底に流れているものが神のかえりみであり、その招きと召しがあるという自己理解から、霊的領域で働く者も公的領域で働く者も、神のかえりみにおいて、生きて働くことへと召されていることになる。あらゆる人々がペスト禍に信仰をもつて向き合うすじ道が差し出されていることになる。<sup>(27)</sup>

### 「神のかえりみ」を生きる

恵みのみ (sola gratia)。これを生きる人とは、自らの人生を「神のかえりみ」のうちに発見していく人のことである、と石田は述べている。洗礼にはじまるキリスト者の生は、その現実化に向けて導かれていく様を見るからであり、それゆえにルターは次のように述べている。「神は洗礼に従って『生きる』ために、それぞれの聖

者に、特別の方法と恵みとを与えたものである……人は自分の状態〔地位〕に応じて、洗礼を満たす、すなわち罪を殺し、死ぬためには、どんな方法が最も役に立つのかを吟味するがよい。そうすれば、キリストの荷は軽く、負いやすくなり（マタイ一・三〇）、不安や思いわずらいをもつて歩むことはなくなるであろう<sup>(28)</sup>。神の召しとはこの「神のかえりみ」の一端であり、根源でもある。神と共に歩み、隣人と共にあることは「神のかえりみ」の言い換えになる。それはペスト禍において変わらない信仰上の確信であり、あらゆる間柄を生きる人々が「神のかえりみ」のうちに自らの人生を発見し、また自らの人生のうちに「神のかえりみ」を見出すところで、自らの歩みを立ち上げていくことになる。神のかえりみを生きる。すなわち、それは祝福を生きることを意味する。

## 信心、即、隣人奉仕

ペスト書簡でルターは、テモテの手紙一四章八節「信心は、この世と、来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となります」を引用して次のように述べている。「信心とは神さまの奉仕（Gottes dienst）に他ありません。神さまの奉仕とは隣人に対する奉仕です<sup>(29)</sup>」。こうして信心の内実は、神を前に他者と共に生きることへと方向付けられ、「神罰」の疑似神学的な受容とは別様の捉え方があることを示している。疫病に際し、その脅威のもとにある人々は信心のゆえにどのような社会の身分と職務であれ、自らの隣人性において神の召しに応えることこそが最善のペスト対策となる。ここでは、ペストから「逃げる<sup>30</sup>ことができるかどうか」という表題の問

いそのものを問い直し、実質的には問いの変更がなされることになる。あなたが与えられた神の召しに応じ、逃げることも可であり、逃げないことも可である、と。むしろ神の召しから人はそこで自らに託せられたものを使い、それに関与する方向が見出されることになる。ともすれば逃げる者と逃げない者との分断に陥りがちな状況において、ルターがペスト禍において基軸としたのは以上のように「大胆に、聖俗の二元化を打破して、この世にある職業と身分のすべてに、この語（召命）を適用した」神学的確信にあつた。<sup>(30)</sup>この脈絡における隣人愛とは、通念上の社会的・道徳的事柄であるよりもむしろ、人間が何ものであるのかを解明する鍵語になる。<sup>(31)</sup>

## 四 結語

ペスト禍という未曾有の事態に直面してルターはいわゆる「神頼み」の信仰でもなければ、ヒロイズム的な信仰でもなく、神を前に隣人と共に生きるいのちを各自が与えられているところに立つことを勧めている。それは自らのいのちが神によって造られ、その人生が神の召しと導きのうちにあることを誰もが真に受け止めることを可能とし、それがペスト禍を生き抜く突破口に相当すると考えられていたからである。結果として、神に召される生において二重の壁が突破されているが、神学理論があつてその応用編にペスト禍があるのではない。むしろ事態は逆のことを示している。つまり、ルターとその同時代の人々がペスト禍という圧倒的な災厄に見舞われ直面する中で、なおも人間に残された可能性としての信、即、愛が考え抜かれ、そこに生じた二つの神学的洞察に

相当する。本稿はそうのように考えてきた。また神を前にして隣人と共に生きるキリスト者の自己理解もまた、いわゆる道徳的教えや倫理的勧告である前に、福音において告げられた人間のいのちのあり様を示している。そう理解するならば、この言葉はペスト禍のようなちの危機において人間の最奥に働きかける言葉になるであろう。ルターのいえば、人は神を前にして生きなければならぬのもなければ、隣人と共に生きることによって救われるわけではない。すでにそのようなちにおいて生かされ方向づけられているのであり、たとえそのような理解ができない状況においても、神のかえりみを通して自らを見つめなおすところに一つの突破点が見出されることを書簡は旨としている。そこでもまた繰り替えされるのは今、ここにある神の恵みへの注視となる。

## 注

- (1) 石坂尚武『どうしてルターの宗教改革は起こったか——ペストと社会史から見る』ナカニシヤ出版、二〇一七年、一七—一八。周知のとおり、ペストの原因が特定されたのは、一八九四年、北里柴三郎とアレクサンドル・イエエルサンによる。
- (2) 前掲書、九頁。
- (3) ロドニー・スターク『キリスト教とローマ帝国』穂田信子訳、新教出版社、九五—一二四頁。スタークはここで後代のキリスト教の歴史家がローマ帝国下の疫病の影響の大きさにまったくというほど触れていない事実を指摘している。他方で、初代教会の教父たちが疫病に対する見解とこれにどのように向き合うべきかについて積極的な勧告が残されている。特にキブリアヌスが疫病を葬式の機会ではなく訓練の機会とするように勧め、「おのおのの正義や心を吟味する」機会ととらえているのはペスト禍からコロナ禍へとつづく縦糸を示しているようにも思われる。
- (4) 青年ルターとペストとの関りをほのめかしている稀少な典拠は以下を参照のこと。エリク・H・エリクソン『青年ルター』西平直訳、みすず書房、二〇〇二年、一四三頁。そこでエリクソンは、ルターが修道院に入ることに「二人の弟が疫病死した事実」と無関係ではないことを示唆している。
- (5) ペスト書簡からの引用はT・G・タッパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』内海望訳、リトン、二〇〇六年を基本とする。ただし、タッパートがルターの牧会書簡集として編集、訳出したものであるため書簡全体が日本語訳になっているわけではない。必要に応じ *Whether One May Flee from a Deadly Plague?* (LW 43)、『*man vor dem Sterben fliehen möge*, in WA 23, 323-379 を参照す。
- (6) ペーター・マンズ『宗教改革とルターの生涯』徳善義和訳、聖文舎、一九八三年、二二—二三頁。
- (7) LW 43, 137-138.

- (8) タップパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』二九〇頁。
- (9) 石田順朗『牧会者ルター』（復刊）、日本キリスト教団出版局、二〇〇七年、二二頁。
- (10) 前掲書、三〇三頁。
- (11) 前掲書、三〇四―三〇五頁。本稿を執筆中、ちょうど報道で、アメリカにおいてはコロナパーティーなるものが開催され逮捕者がでたことがニュースになっていた。驚かされるのは海外だけではない。国内ではユーチューバーである若者が自身が新型コロナウイルスに感染していることを知っていながらにして、いくつもの県を横断し、結果としてウイルスを撒き散らしたという事態がニュースで取り上げられていた。これらは、一六世紀と二十一世紀の二つの疫病への人々の反応が共通していることの証左となる。
- (12) タップパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』、二九八頁を参照。「私たちは、これが神さまから与えられた鞭であり、それは私たちの罪のための罰であるとともに、私たちの信仰と愛を試みる試練——私たちの神さまに対する態度がどうかを見るための信仰の試み、また私たちの隣人に対する態度がどうかを見るための愛の試練——であるのだという確信によって励まされなければなりません」。
- (13) Douglas J. Schuurman, "vocation," in *Luther and the Lutheran Traditions*, 769-773.
- (14) 召命の神学の概論は以下を参照。William C. Placher, *Callings: Twenty Centuries of Christian Wisdom on Vocation* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 2005). ルターと召命についての研究は、Gustaf Wingren, *Luther on Vocation*, translated by Carl C. Rasmussen (Eugene, Oregon: Wipf & Stock Publisher, 1957) ところで、このウイングレンの著作について、フリーリッヒは興味深い指摘をしている。すなわち、一九四二年に著されたウイングレンの原著タイトルは *Luthers Lara om Kaldelsen* であったが、この英訳にいたる際にLaraが抜け落ちていた。Laraとは doctrine であり教理のことである。教理とは、G・リンドベックが指摘しているとおり、ある信仰を世代を超えて文化を横断して共有しているがゆえに言語的なネットワークであ

るから、教理という言葉が落ちてしまうと大事なニュアンスが一緒に洗い流されてしまっている。上掲の論文一九五一―二〇六頁を参照のこと。

- (15) Karlfried Froehlich, "Luther on Vocation," *Lutheran Quarterly*, vol. XIII, 1999, 199.
- (16) 石田『牧会者ルター』（復刊）、一五七頁から引用。原典はWA 8, 588.
- (17) 前掲書、一五九頁から引用。原典はWA 10/L 308, 6ff.
- (18) タップバート編『ルターの慰めと励ましの手紙』二九二頁。
- (19) 前掲書、二九二頁。
- (20) 前掲書、二九二頁。
- (21) 石田『牧会者ルター』（復刊）、八〇頁。
- (22) タップバート編『ルターの慰めと励ましの手紙』二九三頁。
- (23) 人間存在と神の臨在について、権利と対峙して義務を論じた人にシモーン・ヴェイユがいる。その宗教的義務論については拙論を参照。宮本新「公共性と犠牲 十字架の神学を手掛かりに」磯前・川村編『他者論的転回…宗教と公共空間』ナカニシヤ出版、二〇一六年、二二七―二五四頁。
- (24) 義務論の歴史的ルーツについては以下の論考を参照。廣川洋一「義務論の淵源を尋ねて（上）」『思想』no.1121、二〇一七年、四九―六七頁。
- (25) デイトトリヒ・ボンヘッファー『キリストに従う』（ボンヘッファー選集Ⅲ）森平太訳、新教出版社、一九九六年、二四六頁。「イエス・キリストの招きは、教会において、そのみ言葉と礼典を通して発せられる。教会の説教と礼典が、イエス・キリストの現臨の場所である。あなたがもし服従へと招くイエスの招きを聞こうとすれば、そのために何も個人的な啓示は必要ではない。説教を聞き、礼典を受けよ。十字架につけられ・よみがえり給うた主の福音を聞け。ここにこそ、弟子たちに出会い給うたと同じお方が完全にいまし給う」。



- (26) 石田『牧会者ルター』（復刊）、八四頁。
- (27) 前掲書、一五六頁。
- (28) 前掲書、一六二頁。
- (29) タップパート編『ルターの慰めと励ましの手紙』三〇〇―三〇一頁。ルターは「このわたしの最も小さい者一人にしたのは、わたしにしてくれたこと」（マタイ二五・四〇）や「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ二二・三九）をここで同時に引用する。それは究極の神奉仕と究極の隣人奉仕とが、ただ順序付けられているわけでもなければ、並列でもなく、同時性としてとらえられている。
- (30) 石田『牧会者ルター』（復刊）、一五六頁。
- (31) 前掲書、二九二頁。